日本キリスト教団　清水ヶ丘教会

ましみず

Vol.14　No.3
2017.11.5

賛美との出会い

牧師　片平　貴宣

私が初めて出会ったのは「讃美歌」でした。おそらく讃美歌四五二の「ただしく清くあらまし」だったと思います。これは、母校である聖光学院の朝の礼拝で歌いました。しかし半ば強制的に歌わされているような感じがして、みんな入学当初は多少なりとも声に出して歌っていましたが、次第に声を出さなくなり、伴奏だけがむなしく響くような礼拝になっていきました。

やがて私は母教会である福島新町教会の礼拝に集い、「聖歌」と出会います。福島新町教会では礼拝において讃美歌と聖歌を使っていました。学校から配られたのは讃美歌だけだったので、最初行ったときは違いがわからず、近くにいた教会員の方から聖歌を開いて渡してもらったことを覚えています。しかしやはり高校生の私にとって讃美歌や聖歌は堅苦しいイメージがあり、まわりの人が歌っているから何となく自分も歌うような感じでいました。

私は特に音楽に興味があるわけでもなくむしろ嫌なぐらいで、歌うことも好きではありませんでしたが、高校二年生のころ、部活動でハイスクールＹＭＣＡに入部していた関係で、韓国に行く機会があり、「ワーシップソング」と出会います。韓国のクリスチャンの高校生と交流を持つための修養会が開かれ、友達や先輩方と一緒に参加しました。その修養会で歌われた賛美が、ギターやベース、ドラムなどを使い、手を叩き体全体で行うワーシップソングだったのです。国民性もあるのかもしれませんが、とにかく元気よく、たくさん繰り返しをして、楽譜が無くてもすぐに歌えるようになりました。

日本語の歌詞も用意してあり、わかりやすい言葉でした。韓国語もカタカナで発音が書いてあったりして、言葉の違いもさほど感じることはありませんでした。日本に帰ってきてからも、一緒に行った仲間と学校や教会で集まって、ギターが弾ける先輩に伴奏をしてもらってよく賛美していたことを思い出します。

そんなことを通して、少しずつ賛美に興味を持つようになりました。礼拝での説教はよくわからないけれどもせめて賛美はちゃんと歌うように心がけたり、教会学校の聖歌隊で賛美をするようになったりしました。また、高校の先生にクリスチャンの方がおり、集っておられた教会のワーシップソングを歌う集会「コーヒーハウス」に誘っていただいたり、その先生はＣＤも出していて、新しい賛美のスタイルに触れました。

やがて私は高校三年生の一二月に、友達から「バンドやろうぜ」と誘われてエレキギターを始めることになりました。この時は特に賛美をするためにと思って始めたわけではありませんでしたが、献身して東京聖書学校に入学してからは祈祷会の前にワーシップソングを賛美する時間があり、その奏楽に用いられることになりました。

東京聖書学校の祈祷会は、併設をされている吉川教会の祈祷会でもあり、当時は木曜日の午後七時半から行われていました。その前の三〇分間がワーシップの時間でした。リビングプレイズやミクタム、プレイズワールドなどの賛美で、それまでは知らなかった様々なワーシップに触れることができました。最初はギターもうまく弾けませんでしたが、やがて火曜日の夜に賛美チームでの練習の時間を設けるようになり、ギターの訓練と共に賛美リードの経験もさせて頂きました。

そのような賛美の経験は、バイブルキャンプで生かされ、また整えられました。神学生の時に初めてホーリネスの群首都圏ユースバイブルキャンプに参加しました。大勢の同年代の中高生・青年達と賛美の声を合わせるのは、普段の教会ではあまり経験しない、新鮮な体験でした。

神学校を卒業し、石川県の恵泉教会に遣わされた後も、近畿・中部地区で行われていたバイブルキャンプに参加しました。主に奏楽や音響の奉仕をすることが多くなりましたが、子どもたちが喜びをもって心から賛美をしている姿に励まされました。

しかし、地方の教会においてはワーシップソングがなかなか受け入れられない様子も経験しました。この証については二〇一五年一一月一日発行のましみずの巻頭言にも書かせていただきましたが、教会・地区・教区の方々にも喜んで賛美していただける結果となりました。

そして今、私は「ゴスペル」と出会わせていただいています。大勢の人数で声を合わせ、心を合わせて賛美をするのは、聖霊による一致のなせる業であり、主にあって一つとされている教会の姿に通じるところがあります。賛美には力があり、人を救いへ導く福音そのものです。これからも主に感謝と賛美をささげて歩んでいきましょう。